

須加村如來堂紀行

全

須加村如來堂記
正

書庫

Ld.

3*

1

L. 1909

7*

10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

悟海靜者

須加村如來堂
紀行緣起

兼造堂苑梓



須加村如來堂紀行

全



須加村如來堂紀行 抄

東台遊學法門後齋



本間文庫

武彦の國詩玉比郡忍乃須加むかた如來木のれを認めれば
 こけり月海さきうおもひよりいさよび田向乃開扉あつて
 結成とぞ人のいひおこせしききぞいふゆきとぞまづんとこ
 嘉永戊申三月十四日午刻かたがひ東齋とちんちんとして中を
 や探りて校信のいほとらとまよこ古ゆく浦わろすくふといふ
 けふちちがし口すまゝいひかゝり

偶出東台、突要津、可憐世上幾沈淪、怪未難、沒大悲、手摸得、
 飄、自在身

婦はぬ小三雲小澤依留くよらばまのなるものよておのの名はこ
こまきまきて風植博を此瑞なりとやとらひ園小方丈かつたを先
の雪をばらけ風乃塵小寸えぬ一塊の地ありけりぞ夜をく
光とまをこのありてはつれおまじつちんじんまはやとおひ
やわしに時節操感乃磨ちのらく元禄三年壬午正月廿三日
の夜おちつる夢よ金光やとちて三言乃如未茅屋よ津殿よ
まふみはまじも木かめてもよびつたは四月廿三日の夜妻よま
同よすまよれ夢よ感とせけ思夫婦もめて盛告まよかま
とかりあげてその夢廿四日とめて後園と松輪せんかつ一塊の地
よらう木のぼらうまこしてひきおりて 弥陀萬父 祝音 勢ま乃三

尊と感得さうけりこふたて夫婦れのみ冒崇銘贈感涙滿
ゆらち不浄のし洗浴をまらうとあはれ佛壇をとりてすえまら
香華をこまげたりめてもよまらうとのたて恭敬瞻礼をせ
ば金光明とらげわて四つおかやけりばつちえやくとちこちに
はもて老知をせあはなう相とまて管事異乃おもひとなせう
つひよ 城正前部豊後守正武成反小きこえて江戸にまらゆら
年て廣結勝縁もまきて師檀をちりゆ現龍院教議よせ
よまのれをその以九二三薩州醫士 田宮祖小合佛三味勇猛精進は大居士
のまけりよこの三言とあてまらうて時夜よ候と味まらうよまれの
おらひよち 元禄十三年庚辰五月廿四日夢と現龍院を建日

大明院の公辨親王法處よのそま

桂昌院殿より佛龕をひきつりて、そのとせしむ。城まの殿

薩州及 吉田殿 上浦殿 西尾殿より丹靑といふとあり。般若十六

善神 涅槃像 上品曼荼羅を以て巨僧の筆 變り 神 卓惟 尊い言

際よりひきつりて 國家安全 賑ひ合佛と云。其のあと、いふ言 信治

坂乃名 東叡山 長八坂乃このしきと。寛永七年 庚寅に奉る。味

禪に因りて出現乃地有縁と云々 須加村かかへんことと 雲告よりひ

けり。城まを自書て無量壽堂の額と 除地と云へしひけり。直下

堂を今此地と改めしれり。薩州度代 保護 城まの殿乃甚善

らで、九一二三性面居士乃乃かち

十七日、舟をいぬし、すゑとて利根河にまゐりて、ふれし、おせし、こゝて
いひかちをぬのまをか、浮く、いれ、わ、さる

風正布帆不用杖舟艫日入江都波瀾平遠物如海又有

神龍祀元無

おむとぬ乃をれおとまのこゝてかちをぬく、ふしひをかく

大の法事は向拜の額とけり表、為二三老人阿彌陀堂癸巳四月念

可、大清福州鼓山沙門大心書とある。その額が、ひきつりて、義上

前面額を、吾薩摩中将源吉貴傳言珠球中山王素書、控大

清鼓山大心禪師、而寄附、三老人所建阿彌陀堂、臣等親其事、

故為後證記、崇 平徳四年、甲寅、念日、有司島津將監藤原久當

とよりその阿弥陀堂は四大つらに優美なる、殿乃殿もたよを以
ちし。

十九、護法檀有おほおわね、小和ま南寺の前よある。その舟體ふねがたなる。曼
陀羅一幅まんだらあり、小冊を千餘冊の古巻を我吐わがはな、祇尼曼荼羅ぎにまんじらと
ても、舟に雄遊ゆうりゆうなる。寛永七年如來と云の地よ、後ごせまる、とつ。船
のつらしてつ。ちちち。もは編舟へんしゆに積つむ送り、三ツ川ゆを、とせ、しよ
船の利振りぢ、澤さわ、舟ふね、つら、とら。も、大由おほ狐きつねが、ちと、ある、け、り、と、ま
こ、が、さ、お、せ、と、げ、ち、と、ま、ち、と、せ、し、と、ち、ん、し、か、し、開ひら、運つ、船ね、守まも、船ね、荷に
と、は、ら、り、ま、う、け、その曼荼羅まんだら、白狐はくこ、并なら、あ、り、と、さ、ひ、ち、ち、ち、ち、と、云
せ、し、つ、も、あ、ま、う、さ、あ、り、し、け、り、さ、う、さ、の、こと、ち、ち、ち、ち、ち、ち、し、り、振ぢ、川が、の、境が、と

す。ろ、あり、ま、あ、り、す、に、二、三、流、は、を、赤城あかぎ、は、す、ま、う、ら、う、この
澤さわ、田り、乃、畑はたけ、す、ふ、そ、て、父、母、の、は、と、り、は、あ、り、と、志、の、が、れ、て

し、ち、ぬ、は、れ、水みづ、を、入い、れ、あ、り、乃、り、げ、り、ぬ、と、お、ま、い、ら、ぬ、を、は、り、く、さ、か、ら
ま、な、り、この、あ、ま、は、げ、ら、う、ち、ま、い、り、や、と、お、れ、が、さ、ま、う、ち、さ、ん、と、ら
と、を、し、お、も、ひ、は、り、け、て、お、う、ら、ま、い、ら、ぬ、を、も、さ、し、り、ぬ、あ、り、ま、う、せ、
張は、れ、と、う、て、お、ま、て、り

千里長堤せんりやうぢ、擁よう、一川いつせん、南川なんせん、北堤へいぢ、桑田そうでん、中ちゆう、室むろ、聖せい、窟くわく、為なり、吾われ、伴ばん、只ただ、有あり。

水を、馬ば、夢ゆめ、造ぞう。

廿、巖谷寺いはやみ、と、名な、は、ゆ、も、て、世よ、を、す、は、た、も、明あ、く、り、と、う、く、や、ガ、
そ、と、う、く、ち、ち、か、が、の、お、も、ひ、や、り、れ、は、か、う、う、ま、を、ま、と、し、ら

サレバも人々船政も其の旨のすべし
されども其の時ありしよりでかりし
ハ日ともかひ

サレバはあまもよき世をまぎして先
てサレたに悔なきに其の瑞嚴殊勝
のよきなりおれ去年は信濃乃善光
有る轉變化城論のよきと親し
え乃同體の御佛は徳恩をまぎ
尊容をまぎし

死焼たのも乃吾知也
死焼たのも乃吾知也

はたつたこと少は談
いふまねにがうて夢の世
うと木もいはい

木はまよの父乃
寺のまよはまよ

了未言昔當年
やあてたうけ

ぬれあはれまよ

いふていふまよ

世のまよはまよ

世のまよはまよ

世のまよはまよ

何れ時ずか。いすも。り。な。く。た。れ。り。ま。は。し。て。あ。ま。ま。あ。る。者。か。
も。て。如。法。依。止。也。な。り。阿。佛。と。念。施。う。う。い。ふ。は。お。も。せ。浴。信。志。
ま。り。て。け。り。ま。て。ん。い。ん。し。もの。う。き。び。の。け。い。も。を。と。し。く。掃。き。
き。り。と。ま。ん。て。ん。に。老。い。も。の。か。も。か。し。も。心。あ。り。も。ち。さ。し。し。か。み。り。ま。り。
ち。ん。か。ん。い。て。奥。を。あ。げ。お。も。ち。の。あ。り。の。ま。ま。や。この。

阿。佛。は。お。ま。け。か。ら。く。く。も。極。重。惡。人。無。他。方。便。唯。攝。淨。陀。羅。尼。
樂。園。と。て。諸。神。諸。佛。の。心。を。た。ち。り。ま。ひ。五。逆。十。惡。れ。の。よ。も。も。ひ。
と。も。ひ。の。ご。と。か。け。さ。く。も。二。世。安。樂。に。お。か。り。て。ら。い。し。も。と。ん。現。衆。
この。五。逆。乃。娑。婆。に。あ。と。と。り。れ。ま。ひ。善。光。寺。如。來。と。同。體。不。二。ふ。
り。ま。り。て。や。わ。かれ。

粉。封。せ。お。も。ち。こ。の。か。ん。こ。れ。ま。の。あ。り。ま。お。も。ま。ひ。せ。し。ま。し。
こ。の。か。志。こ。の。か。志。こ。の。か。志。こ。の。か。志。こ。の。か。志。こ。の。か。志。こ。の。か。志。こ。の。か。志。こ。の。か。志。こ。の。か。志。

廿九。鐘の銘をみる。

信州善光寺同體阿彌陀如來 東嶽山現龍教院

阿彌陀如來常念佛堂九九三居士同。無量院源清大姉併。由
宮氏才理軒齡庵竹道鑄銅鐘。傳天台教觀住持沙門教誥為

之銘曰 鐘之為器 本具妙音。響徹塵刹 頓摧剎林

淨土門啓 圓通理深。一心雲散。三觀月曉。玉泉流盛。

尊徒安心 江城鞏固。水利登際。

元禄十三年歲次庚辰五月廿四 當院第五世大僧都敬誌

おかしきものなりて。日とれくひかちぬが四月六日あり。
けわとのなつ南よこ下片、威大、こせつ小西思順、入水、

高風何、不押、雲瑞、蒼樹、濛濛、夏、寒、陰、雨、冬、情、梅、實、落、漫、所、
泥土、失、甘、酸

ナ四のむり、同一村、名川島の、ま、
かんとし、ち、
る上乃、

ナ七日、
何、
廿三日、

ま、

よく、
こ、
常、
お、
さ、
土、

い、
妹、
十

去をわたりてはくしとあふりゆふにうらみくはれなき
このわとわもひげをれ詩高たなく日すれう詩二首おがそか
或伴撫夫或野翁行南北又西東更々物関吾意遠有
慈娘呼歌童

清閑多事山登仙相御輕風暮淡烟堪送人間一氣息注ち
流水耕舟四

ひきゆくこまばらなをここといふ院子のごとくながれのこころをわ
月廿八日むかりなるしを在れしをてがしんとすくにんづをうと
みつ行面までもととてあはれこの衣は例もも暑さもえかしく樹緑の
なとゆくもかくわんしおめぬ思中ひゆきかへ人もち鶴米

日影のうつろいとまぢこころをわめて桶川さそひまれし上のうら
みのがてよりあかしくあきしく

すももはせよりのまをまれはせとちのちをたかむまを
まじひがけはまをたつていそがしそとまをたのこもはま
いでし中れはせがちれひまをかまはれぬ

九月廿日松信ははてまをまて傍山光千法華見明赤阿ははもとす

いとまはけてかたよる詔囀の

なづ月乃いひこのあそくはまをつゆとあはれのみまよひま
とまらばあは

あさゆふ乃あふんははゆふのあふんはあふんはあふん

— 九つとよひてふとずるひとまそおがえあやむまことぞとて
サセの夜はめでたて竹葉わさしくかき流く

草菴一夜會同盟河水煮茶區五天鼓掃雲箋記即事北風
夢斷竹煥榮

ゆめはとよひ人々は義山を誦く夢に菴乳年春秋世壽松指
醒所松坡月舟住山文明凌雲竹坡文清孤村一蒲塵外表蓮草渚
松蔭木嵩景二舟も関く此知じあまらんごんごちんあやんれんま
おろくおけりてまをゆく維摩は空にふりあけなほこのうと
すの悟しくとれもほそげてあゝねむれ

十月すごふまきりまきりより蓮とあつ夫婦此墓のまゝとあつぬと不

いそわさひひふの歌もつとれとくはあまのうらりちて二三居士の
墓ま回南志茂松樹乃もととてそれの觀音は名像とひつててそれ
なぬ三の石像ありけりこのをとれ葬雨よて志ありぬまよれ
うまうまふた墓とむと一つににれかん夫婦乃墓とあり
けりなち切國善忠大徳元禄六年己亥二月十日理性妙入禪尼
とありはけてありけり尼の忌日ありてをれぬる寢丸五年片子
二月十三日在まきり夫婦此もの如來と感請志ありてのち大徳
都敬謀の門下様にて濟度と善忠妙入の名とくまひに多善光
うまをうらり堂記ありけりあそ乃像は墓と二三居士乃
墓の左右より子孫れものよとあつらげよまきりんとてよびお

のつゝおきくけくちあひかりもいぢやうや、君去正徳二年壬辰
十二月十二日を、墓の四面よりうもぢを、其人所せん

今日相くのもうそいれが日光のあつとして服部安編とむくち

すまてまふいづいづのゆめとかうらむこえてふりふ、遠方うらむ

とい、おれおもひや、うかくて、佛におもい福有、曼荼羅とお

て本會者のむしをなせり、いひは君命を奉り、おんまう

かんといし、おれきうてものい、いれあさぬとも人乃、木のれ海

く、いあささ、ぬま、いあててもう、いれあさぬとも人乃、木のれ海

見かちてまふいづいづのゆめとかうらむこえてふりふ、遠方うらむ

十二、毎月廿日光明真言、月々廿四日八百菩薩区念佛

信壽かまふあずとぞ、ひさびさ

よぬいそくあもらね、名利根はすなせとす、ぬれ君ごころを

とらんすめんに、いづいづ

かぞせとす、てんもつ、あつては、いづいづのゆめとかうらむ

巳酉元日佛前、そ心経をおくちて例のとご、いづいづ

みふ地のうらむ、あささ、いづいづのゆめとかうらむ

す、て、あつては、いづいづのゆめとかうらむ

人自城、其のあすとして、いづいづのゆめとかうらむ

のい、こくかば、いづいづ、日先、あつては、いづいづのゆめとかうらむ

いづいづのゆめとかうらむ、いづいづのゆめとかうらむ、いづいづのゆめとかうらむ

そのをいふのちうへ木もひびきしれはかやうあそびも
とては雨聲れ松風とわ乃川を

こをいふもよそいれとちくもききてはちやんとのうち山
のたゞて塘雨竹も成功半信柳水など一や

不詳徒来北畫圖明窓閑寓書中憑勿弄玉樹樓啼鳥道
澗浪出太湖

雨過雲收雲御風落頭亭子水西東數峯一洗真如浴時有
篇舟下碧空

閑人閑去棹長流到去閑愁一篇舟前面閑去閑出沒後峰
斜日射閑鷗

一峯遠現白雲瑞密樹疎林萬里山飛瀑噴風天妙雨去夜
隨水出塵寰

このわの木なくあつてをさしとていふとていふれより
二月五のあつたふもて安楫竹吹れこよう福着よりいふれもの
あまのきぬやう子志てあててもいふよもせこくさうらうら
お巻れとていふてあつていふるのもまをれけり

